東京新聞（夕刊）

2016年（平成28年）8月31日（水曜日）

「会話」もう気負わない

ろう者の映画監督「日本縦断」自転車旅

3日から新宿で上映

今村彩子さんの映画「スタートライン」の一場面＝Studio ＡＹＡ提供

耳が聞こえない映画監督の今村彩子さん（三七）＝名古屋市緑区＝が、自転車で日本縦断に挑んだ自分の姿を撮影した「スタートライン」が九月三日から、東京・新宿のケイズシネマで上映される。五十七日間の旅のテーマは「コミュニケーション」。支えてくれた家族の死をきっかけに、自分にとって最大の課題と向き合った。

親しい人だと唇の動きで発言内容を理解して会話できるが、初対面では難しいという今村さん。映画では居酒屋で、伴走者で自転車指導役でもある自転車店員の堀田哲生さん（四二）＝愛知県長久手市＝と客との談笑に入れない場面がある。

泣きながら「どうやって会話に入ればいいの」と訴える今村さんに、堀田さんは「（会話に入れないのは）聞こえないせいじゃない。コミュニケーションが下手だからだ」と話す。

旅は二〇一五年七月、沖縄県から始まった。一四年に母加代子さん＝当時（六三）＝と祖父弘秋さん＝同（九三）＝を亡くした。気分転換にクロスバイクで走ると「社会で生きていけるように」と読み書きを教えてくれた母の姿を思い出し、コミュニケーションが苦手な自分を変える旅を思い立った。

当初は旧知のろう者ばかり訪ねた。自転車がパンクした旅人を見掛けても、会話をためらって通り過ごしたこともあった。

転機は北海道での出会い。同じ難聴で、しかも日本語を理解できないオーストラリア人の男性ウィルさんが、同じように自転車で日本を縦断しながら、積極的に現地の人たちに話し掛け、コミュニケーションを楽しんでいた。

その姿に「まず相手と話したいという気持ちがある」と感じた今村さん。「頑張って会話しようとするのではなく、話したい人と話したい時に話すだけでいい」。幼い頃から抱いていた気負いが薄れた。

「これまでは映画で『ろう者を分かってほしい』と、一方的に求めるばかりだった。旅を通じて私は白紙の状態になった。今がスタートラインです」。笑顔に、もう気負いはない。

（立石智保）